

目的 高齢期における孤独な心の問題は、加齢に伴う精神的な内面生活のあり方に関する問題であり、この孤独意識の重要な関連要因として高齢者の性格特性があげられる。すでに、演者は、高齢者の孤独意識を生活全体の満足度に対応するものとして捉え、居住形態にあわせて、家族・親族とのかかわり合いの面から理解することの重要性を指摘し、孤独意識と人間関係に関する要因並びに心理的要因との関連を追究してきた。特に前報では、孤独意識の類型化の手がかりとして「人間相互の理解・共感についての考え方（感じ方）」と「自己の存在への目のむけ方」の2要因による2次元の仮説的構成により、4種類の孤独意識 ①②③および④型 を導き出し、各類型ごとの特徴を実証的に検討した。

本報告では、近年、独居生活形態の高齢者が増加傾向にあるため、独居生活者における孤独意識と性格特性の関連を検討する。

方法 被調査者はT市に在住する満60歳以上の対人接触の可能な独居生活者である。調査は、第一次調査として被調査者の生活像を捉えるための質問紙調査を1982年4月から5月の間に、第二次調査ではY-G性格検査を同年6月から8月の間に実施した。

結果 1、被調査者は平均年齢65歳、そのうち8/5%は女性、さみしいと思う程度は「少し淋しいと思うが約1/3を占めて最も多く、次いで「全然、淋しくない」、続いて「あまり淋しくない」の順に少ない傾向であった。2、Y-G性格検査による被調査者の性格類型としては、安定積極型であるD型と安定消極型のC型が多かった。続いて、平凡型のA型が多く、B型やE型は僅かにみられた。さらに、性格類型と孤独意識の程度を追究する。